

---

# 異世界の王宮事情

するめ315

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の王宮事情

### 【Nコード】

N1201T

### 【作者名】

するめ315

### 【あらすじ】

国の法律を守りつつ、自分の欲望を満たしつつ、異世界の人間を嫁にする計画進行中。

異世界の〇〇シリーズ第4段。

**（前書き）**

思いついたが吉日。バツシュの勇姫からめ捕り計画進行の模様です。  
楽しんでいただけると嬉しいです。

夜も更け、深夜とも言つべき時間、国王の寝室から隠し通路を通じて、王妃間の寝室へと入る。

物音をたてぬように慎重にベッドへと、近づく。

ベッドの近くには、ベッドの主が脱いだであろう夜着が落ちている。

ギシ

ベッドのふちに腰をかけ、ベッドの主である少女の頬に触れる。

「勇姫……。」

名を呼び、起きないことを確認する。

「……うう……ん……。」

唸るのはいつものこと、安心して触れることにする。

顔にかかる髪を梳き、額、瞼、頬、唇、首筋、胸、足、順を追って触れるだけの口付けをする。

最後に、愛らしい唇に深い口付けをする。

ぴちゃ、くちや

「ううん……ん……。」

苦しいのだろうか、勇姫が鼻にかかった卑猥な唸り声を上げ、顔をそむけようとする。

だが、まだ、逃がす気はない。  
顔を固定し、より深く口付けていく。

くちゃあ、ぴちゃ

「んん…… あはあ…… つうん……。」

時間にして、およそ5分くらいだろうか、唇を離す。

口付けの後の腫れぼったい唇に、名残惜しさを感じながらも、これ以上やると止まらなくなるので、王妃の間の寝室を後にする。

これが最近の私、バツシュ・レオン・ハルベルト。セーラの日課である。

本音を言えば、もつとしたいし、あの美しい身体を味わいたい。

しかし、勇姫はセーラ国の女子の成人年齢である17歳をまだ迎えておらず、国王たる私でも、国の法律を破れば処罰が下る。

それに、婚前交渉などして、勇姫が貴族の馬鹿どもに、身持ちの悪い女だと言われるのは我慢ならない。

そしてなにより、勇姫の心がまだ私に向いていない。

まあ、これについては、おいおい向かせていくし、妹思いの兄たちのおかげで、恋人や思い人がいなかったことも調査済みなので、問題ない。

勇姫の異世界生活は、ほとんど問題なく行えているようだ。

ただ、やはり異世界、生活の仕方が違うらしく、時々微妙な顔をしている。それもまた、愛らしい。

我慢できないときは、かわいらしい『お願い』をしてくれる。これは、鼻血ものだ。

『わがままは言っちゃいけないけど……でも、どうしても……。』  
という感じがありありと伝わってくる。

今夜の夕食の時も『庭の散歩がしたい』というお願いに、即効許可をだした。

ただし、侍女や護衛がいようと、私の目の届かないところに勇姫がいくのはいやなので、毎日、午後のひと時を勇姫と散歩することに決めた。

城下にもいきたいようなので、最低でも半月に一度は勇姫と城下に出かけることも決めた。

また、風呂の件だが、勇姫の世界では、湯船に湯をためて入るが一般的だったようだ。そういう風呂が城の中にないわけではないが、他国からの来賓用が主であり、個人用ではなく、多人数向けである。勇姫の肌を誰かれ構わず見せる気にはならないので、王妃の間の隣の部屋を急遽改装中である。

将来的に、いっしょに入るのがたのしみである。

たのしみはこれだけではない。

勇姫のドレス姿、これまた鼻血物である。

勇姫に着させているドレスは、勇姫より少し年齢が上の、この国の結婚適齢期といわれる年代、18から20歳の女子が好んで着るデザインのを着させている。

あの幼い顔と、顔に似合わないスタイルとがいまって、背徳的でたまらない。

まあ、常にドレスでいる必要はないのだが、着る習慣がなかったよ  
うなので、慣れてもらうためにも着させている。

勇姫の生活が滞りなく行えているのも、私のたのしみが満たされているのも、勇姫に付けた侍女や、護衛が優秀なおかげであるが、い  
かんせん、奴らの視線が痛い。

主である私に向ける視線ではない。しかし、勇姫を思つてのことだ  
と思うと何とも言えない。それに、あの視線がなければ、間違いを  
起こしていたかもしれないことは、一度や二度ではない。

だがしかし、勇姫に夜着を着せて寝かそうとするのはやめてほしい。  
勇姫の美しい四肢を眺め、時々は口付け、将来についての想像をめ  
ぐらす。それこそが、満たされる欲望を持った私の、毎夜、一番の  
たのしみなのだ、奪われてしまったらたまったものではない。欲望  
が爆発し、勇姫に襲い掛かる。これは、まず、間違いない。

だからこそ、欲望が爆発しないうちに、勇姫が17になった折には、  
すぐにでも婚礼の儀を行いたいと思っている。  
でなければ、法律を犯すことになる。それは、一国の主としてはあ  
まりにも情けない。

セーラ国では、王の正妻である王妃にはある程度身分が必要になる。  
貴族であれば、侯爵以上の家の出であることが望ましい。側妃や愛  
妾となると、あまり身分は関係ないのだが、勇姫以外を妻にするつ  
もりはない。

しかし、勇姫は異世界出身。この国での身分など無いに等しい。と  
なると、ある程度の貴族に養子に出すことが望ましい。  
侯爵以上で、政治的な力もあり、王に齒向かわず、勇姫の力となつ  
てくれる存在……。

思わず顔に笑みが浮かんだ。

「セルドル公爵家に養子として迎えてもらおう。」「

私の欲望を秘めた声が、深夜、一人きりの寢室に響いた。

(後書き)

たぶん続くんじゃないかな？



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1201t/>

---

異世界の王宮事情

2011年5月8日21時38分発行